

# 学研教育総研レポート

学研教育総合研究所 田村尚志

## 夏休みはマイ探究の インキュベーター

2025年12月、文部科学省の生活、総合的な学習・探究の時間ワーキンググループで、より質の高い探究を目指すための概念整理を行う中で、「探究」と「探究的な学び」は違うものであることが示された。さらに26年4月、同ワーキンググループで、探究の形態を「テーマ探究」と「マイ探究（個別探究）」に整理しようという案が示された。

また、取りあげる「課題」という言葉が困りごとを想起させ、自己の興味や関心などに基づき「解明したい」「問い」などが読み取りづらいということも指摘された。

ここでは、夏休みを前に「マイ探究」や興味、関心のベースにある「好き」、さらに「課題」とは質の異なる「問い」などについてみていきたい。

### ◆自由研究の歴史をひも解く

「マイ探究」と聞いて「自由研究」を想起される方もいるかもしれない。探究からちよつと横道にそれるが、自由研究に目を向けてみよう。

自由研究の萌芽は、1935年に出された『夏季休暇中に於ける 生徒の自由研究一斑』

（石川県立金沢第三中学校）にみることで、

「生徒に教科書とノートより解放せられた彼等自らの意欲による自由な研究をささる機会を與へて、積極的な研究心を養成しなければならぬ必要を痛感する」

という緒言から始まるこの本に掲載された自由研究のテーマは200を超え、多岐に渡る。優秀作品は、当時の中学の教科ごとに整理され、テーマ、内容と一部の作品が誌面で紹介されている。

例えば、数学科では、「 $\pi$ の歴史的研究」「関数のグラフに関する系統的研究」、物理科では、「写真の研究」「点滅器」「盗難報知器」「ラヂオ受信機」など。化学科の「清酒の醸造」「醤油、味噌醸造法」、体操科の「グラフ作成（脈拍、呼吸に関する）」。博物科の「昆虫採集」「植物採集」といった標本、工作作業科の「帆船」といった作品は現在の自由研究・自由工作などと変わらないものも見受けられる。

夏休みの課題として登場した自由研究は、その後、教科の一つとして、昭和22年（1947年）に登場する。

教科として設置した理由については、「児童が一人でその活動によって学んで行くことが、なんのさしざわりがないばかりか、その方が学習の進められるのにも適当だということもあるが、時としては、活動の誘導、すなわち、指導が必要な場合もある。このような場合に、何かの時間において、児童の活動をのびし、学習を深く進めることが望ましいのである。ここに、自由研究の時間のおかれる理由がある」と説明され、また、取り扱う内容として「ある児童は、工作に、ある児童は理科の実験に、ある児童は書道に、ある児童は絵画にというふうに、きわめて多様な活動がこの時間に営まれるようになる」と、想定されており、現在の「探究」の考え方とかなり近い教科であることがわかる。

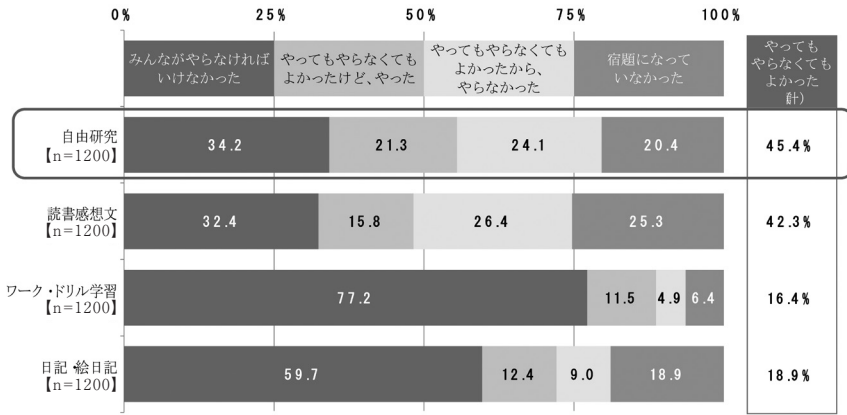
こうして小学校4年生以上・中学生に教科として採用されたが、昭和26年（1951年）、名称が「教科外活動の時間」と改められ、教科からは消える。

### ◆宿題としての自由研究

教科として消えたあと、自由研究は夏休みの宿題として生き残る。これには、宿題がワークのような課題ばかりで、工夫の余地がなかったことを憂う教員の思いがあったのではないか。その後、発表の場となるコンクールなどが開催されることとあいまって日本中に広がっていく。

2018年、小学生の全国調査（※1）では、実に81・3%が夏休みの宿題として課さ

図1 夏休みの宿題 自由研究はやらなければいけなかったか(※2)



れていたことがわかる。しかし、この頃から夏休みの宿題自体を減らす学校、全廃する学校が増え始めている。当然、自由研究も宿題ではなくなっていた。  
25年の同調査(※2)では「自由研究をやらなければいけなかった」児童は34.2%であった(図1)。

### 「マイ探究」が次期指導要領のキー

#### ◆「探究」と「探究的な学び」

さて、話題を「探究」に戻そう。

探究や探究活動が浸透していく中で、課題の提示から手続きの方法、成果のまとめ方で、教師が示してしまうものもすべて探究とひとくくりに行っていることが問題視される。中教審の論点整理で、教師のかかわり、学習者の裁量から探究のパターンが整理され、「探究」と「探究的な学び」をきちんと分けてみていくことが示された(図2)。

図2の学習者の自己裁量が狭いものが下段に。上にいくに従い自己裁量が広いものとして次のように整理された。

- ① 確認のための探究(confirmation inquiry) : すべて教師から与えられる。各教科の実験・確認活動など。
  - ② 構造化された探究(structured inquiry) : 課題と手続きは提示。成果のまとめ方は児童・生徒が工夫する。
  - ③ 指導された探究(guided inquiry) : 課題は教師が示す。手続きと成果は児童・生徒が決める。
  - ④ オープンな探究(open inquiry) : 課題・手続・成果のすべてを児童・生徒が自己決定。真の意味での「探究」。
- いきなり④から取り組むことはできないので、ステップアップしながら真の「探究」を目指す。

図2 探究と探究的な学び 探究の4パターン(※3)

	課題	手続き	成果
④ オープンな探究			「探究」
③ 指導された探究	✓		「探究的な学び」
② 構造化された探究	✓	✓	
① 確認のための探究	✓	✓	✓

✓ は、教師からの情報が与えられているかを示す

学習者が自己決定できる裁量

振り返って、自由研究という宿題をみてみると「自由」という言葉のもと、すべて学習者の裁量ということで課されることが多かった。このような段階を踏むことを教員側が想定し、学習者の段階に応じた指導ができれば、もっと取り組みやすい宿題になっていたかもしれない(教員側の負担はかなり大きくなるであろうことは想像に難くない)。

#### ◆探究II 課題解決か テーマ探究とマイ探究

また、探究のテーマとして取りあげる「課題」が、その言葉のニュアンスから「困りごと」を想起させ、「知りたい」「やってみたい」という好奇心に基づく探究テーマが読み取りづらいこと、探究が地域課題の解決やグループでの活動であるかのように捉えられていることなどから、26年4月の審議会でも、探究の

※2 学研教育総合研究所「小学生白書 2025」

※3 文部科学省・教育課程部会・生活、総合的な学習・探究の時間ワーキンググループ配布資料(2025年12月26日)をもとに作成

図3 テーマ探究とマイ探究 (※4)

形態	テーマ探究	マイ探究 (個人探究)
	← 課題設定に関わる裁量 (導入時) →	
考え方 (具体例)	<ul style="list-style-type: none"> <li>教師を起点として学年・学級等で共通のテーマや課題を設定</li> <li>例 地域防災について地域課題を見出し、学級全体で提言をまとめて地域に伝える</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>個人を起点としてテーマや課題を設定</li> <li>例 特定のテーマのもと、個人や小グループで課題を設定し活動する</li> <li>例 興味・関心や問題意識に応じて、個人の課題について研究や作品制作等を行う</li> </ul>
志向性	<ul style="list-style-type: none"> <li>特定のテーマを掘り下げることで、興味・関心を広げたり、見つけたりすることをとりわけ重視</li> <li>学級や班を中心とした共通の体験や協働を重視</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>一人一人の経験・体験に基づき興味・関心を深掘りすることをとりわけ重視</li> <li>共通又は類似の興味・関心をベースにした個人同士や少人数グループでの協働を重視</li> </ul>

形態を「テーマ探究」と「マイ探究 (個人探究)」に分ける案が出された (図3)。

「マイ探究」は、個人の興味・関心、問題意識に応じた研究、作品制作等を行うというものだ。先に述べた探究のパターンでみると、マイ探究はおおむね④の「オープンな探究」になることが想定され、「課題の見つけ方」が大変重要であることがわかる。

### ◆諸外国の取組も参考に

次ページの諸外国での「マイ探究」に近い取組を見てみよう (図4)。

シンガポールの「アプライドラーニングプログラム (ALP・※5)」は、学校教育の中で学んだ知識を、現実の場面で使う力を育てるための学習プログラム。学問の場で学んでいることの関連性と価値を理解し、知識やスキルを習得するための強い動機づけと目的意識を育むことを目的としている。試験対象ではなく、知識と思考能力の応用、想像力を広げ、社会や産業の実際の場面に応用することに重点が置かれている。学校ごとに内容が違うのが特徴で、以下のようなテーマがホームページで紹介されている。

●科学、技術、工学・数学 (STEM)  
 …都市と都市技術／新興技術／交通の未来／健康・食品科学／持続可能性など

### ●言語

…ドラマと討論／英語／ジャーナリズムと放送／スピーチと演劇

### ●人文学

…デジタルメディア／フィールドスタディ／メディアリテラシー

### ●ビジネスと起業家精神

●美学  
 理数系にかぎらず、人文系も含め、広範なテーマで、実社会で使う学びを扱っていることがわかる。

こうした諸外国の取組なども参考になるだろう。

### ◆夏休みに「好き」を見つける

「個人の興味・関心や問題意識に基づく課題」を見つけるためには、自分自身の興味・関心など「好き」を見つけることが必要。ただ、ふだんから意識していればともかく、おいそれと見つかるものではないだろう。そこで、夏休みのような長期休暇に、じっくり自分と向き合う、さまざまな体験をする、家族と時間をかけて話をする……など、ふだんできない時間の使い方から、「好き」「関心」を探してみてもどうだろう。

かつての自由研究もそのねらいとしてはよかったのだろうが、残念ながら「宿題」であり、「よい結果」や「好ましい結論」などが求められてしまいがちだった。

そこで、宿題という義務から離れて「好き」「関心」を探してみるとよいのではないか。

小学生が義務や宿題から離れて、自らの興味や関心で追究していった結果が、大人、研究者を驚かせた事例を二つ紹介しよう。

### ●夜行性だと考えられていたカブトムシが特

※4 文部科学省・教育課程部会・生活、総合的な学習・探究の時間ワーキンググループ配布資料 (2026年4月15日) から

図4 諸外国におけるマイ探究に類する取組事例（※5）

実施国・地域	名称	対象	取組の概要
オーストラリア 南オーストラリア州	Activating Identities and Futures (AIF)	高等学校3年生相当	生徒の自立的学習と生涯学習能力の育成を目的として実施される取組であり、生徒は興味・関心に基づいて学習目標を設定し、情報収集や観察活動等の探究活動を行う。その後、活動を通して得られた情報を探究の成果として取りまとめて他の生徒と共有し、探究活動の価値や意義に関するディスカッションを実施する。
台湾	學生自主學習	高等学校に在籍する3年間	生徒が自らの興味のある分野やテーマを選定し、学習内容、学習方法、学習を通じた目標等をまとめた学習計画を作成する。作成した学習計画を基に探究活動を実施し、その結果を取りまとめ、プレゼンテーションや報告書等の形式で共有する。
シンガポール	アプライドラーニングプログラム (ALP)	全ての小・中学校において必修	生徒が各科目において学んでいることとの関連性と価値を理解し、知識習得に対する目的意識を持つことを目的として実施される取組であり、各生徒の興味・関心に基づいて複数の分野に横断するテーマを選定し、探究活動を行う。
フィンランド	事象学習 (Phenomenon Based Learning)	全ての小・中学校	科学的発見、科学技術の動向、自然災害等の見たり感じたりできる事象をテーマとして選定し、複数の視点から問題の調査や好奇心に基づいた探究を行う。探究活動は、動機づけ・計画・収集・構築・表現・評価の段階に沿って進められ、それぞれの段階において学習戦略を定めた上で行う。

定の本（シマトネリコ）に来ると、夜行性の行動パターンが変化し、昼間も活動するようになったことを見つけた研究。

●国立科学博物館に保管されていたヤマメの一種とされていた剥製。ニホンオオカミではないかと気になった小学生が文献などを探し、とうとうニホンオオカミの剥製であることを明らかにした研究。

このように昆虫好き、絶滅動物好きという小学生が観察眼を養い、他の誰もが気づかなかったことが気になり、それを粘り強く調べ続けた……。保護者や周りの大人は、真意はわからずとも、その熱意から、大学や博物館の研究者へつなぐことで、すばらしい支援体制ができたことも大事なポイントだろう。地域の科学館などの学芸員などに相談してみるのもよいのではないだろうか。

もちろん、調査や実験結果がすべて思いどおりの方向に進み、満足する結論に結びつくとはかぎらない。先に挙げた二つの研究も、行きづまったことは一度ならずあったに違いない。「好き」が彼らを奮い立たせ、一つの大きな結論を織りなすことになったのだろう。結果を求めずに、「好き」を探すと割りきつて、夏休みを過ごすということが大事な一歩。また、「好き」は大人や既存概念で判断してはいけない。ある高校の探究をお手伝いすることになったとき、そのクラスの男子に「好きなこと」を聞いたら、9割ぐらいが「ゲーム」と答えたことに一瞬、哑然としたが、ひ

とくちにゲームといっても多種多様。

オンラインゲームはコミュニケーションやストラテジーを学ぶ場だとか、自らゲームを開発するようになれば、攻撃にさらされる日本のセキュリティ対策の最前線に立つハワイトハッカーになるかもしれないとか、「好き」の先を早計に判断してはいけないのだという思いがした。

25年ノーベル化学賞を受賞された北川進氏は、「無用之用」という言葉でご自身の研究を語った。「多孔質の『穴』という一見、『無』に思えるものに価値を見いだすことができた」と。筆者は数年前、ある医学雑誌にこんな記事を書いた。

「自由研究は、宿題の枠を飛び越えて自由を得たとき、本当の自由研究になるのだろう。すでに科学の常識を覆すような研究が私たちの知らないどこかで進んでいるのかもしれない。そんな機会を失わないためにも、大人が見守り、おもしろいと思った研究は、変なプライドは捨て、既存の説を忘れて「スゴイ！」と認める謙虚さをもちたいものだ。日本の未来をつくるエネルギーは、子どもたちの素直で純粋な気持ちにこそ宿っているのだろう。今後、どんなすばらしい自由研究に出会えるかと思うと、楽しみでならない」

自由研究を超え、夏休みを「マイ探究」イニキューベーターの場として「好き」を探す楽しい時間としてほしいものだ。

※5 シンガポール・Ministry of Education Applied Learning Programme; <https://www.moe.gov.sg/secondary/schools-offering-full-sbb/school-specific-opportunities/applied-learning-programme>  
文部科学省・教育課程部会・生活、総合的な学習・探究の時間ワーキンググループ配布資料をもとに作成